

やり直し社会



一二年前に米国に着いた当初は目に映るものほとんどすべてが気に入らなかつた。どこにいてもサービスが悪いし、人は横柄、話をすれば皆お金のことがかり気にしているようにみえた。

実際そういう面は今でもあると思うが、私の拒否反応そのものは、新しい社会に移ったときによく起こる典型的な反応だつたと思う。何事も慣れなければ居心地はよくならない。

一年ほどたつて、気に入ることが少しずつ増えてきた。何も住居の広さとか、車社会の便利さとかいう表面的なことに限らない。社会の機構といったもう少し深いレベルで気に入ることが出てきたのである。その中でもっとも気に入つたのは、ここはやり直しのきく社会であるということである。

これにはいくつかの面がある。まずその言葉通りの意味で、米国社会ではやり直しをして成功する人に何人も出会う。大学院で同級になつたJ君は、車の修理工上がりであつた。高校を出て修理工になり、小さな店で働いていたが、エンジンの回転を見ていううちに角運動量の保存則を思い出し、物理を勉強した

くなつて大学に入ったという。

日本でも特別の天才ないし努力家ならそういうこともあるかもしれないが、失礼ながらJ君は普通の人のように私には見えた。そういう人でも、それほどの社会的抵抗を受けずにパークリーの博士号が取れる。私にはそれがとても素晴らしいことに思えた。

友人のC君はコロンビア大学で口頭試験につまずき、パークリーに転校してきてめでたく博士号を取つた。別の友人のP君とK君はともにパークリーでの試験に落ちたが、P君は最終的にはマサチューセツツ工科大学で、K君はニューヨーク州大ストーンブルック校で博士号を取つた。皆、文字通りやり直しの機会が与えられ、最終的には成功しているのである。

これは本人にとつて幸いなばかりでなく、社会にとつても有能な人を一人でも埋もらせないという点でいいことであると思う。

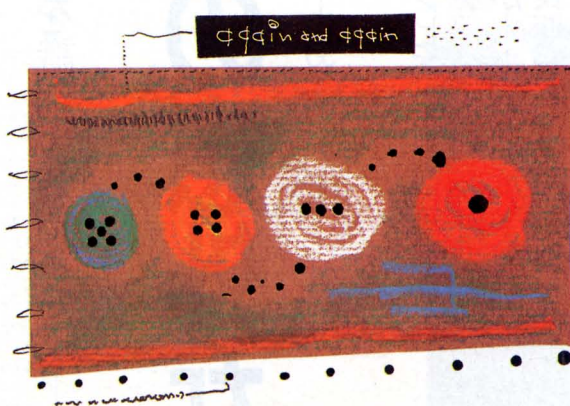
「やり直し」を拡大解釈すると、専門分野の変更もその内に入るだろう。実際、米国には自分の興味に従つて分野を変える人が多い。固体物理を専門としている日本の友人が訪れてきた際、あのニュー

ラルネットで有名なホップフィールド氏は、昔の固体物理の教科書の序文に名前の出てくる人だよ、といつても信じてもらえなかつたことがある。ホップフィールド氏は昔パークリーで物理の教授、いまはカリフォルニア工科大学で化学と生物の教授という異色であるから、米国でも珍しい方だろう。

二年前になるが、クオーク理論で名を成したツイイク氏がセミナーをするというので行つてみたら、耳の構造と働きに関する話であつた。また、私の属する地球惑星科学の学部で教授五人と食事をしていたら、私以外は博士号を物理ないしは化学で取つており、地球科学は私一人であるとわかつて、いささか驚いたこともある。

こうした現象の奥には、さらに社会の本質的な問題が横たわつていふように思う。やり直しが許される社会とは、おそらく皆が人のうわさ・判断・カテゴリー化に惑わされずに、自分で情報を集め判断をするという習慣のある社会だろう。そういう習慣を持つ人は日本にもいる。しかし、米国は社会全体がそれを奨励しているように見える。そこが魅力だ。

絵ヨージ・八夕



たにもと・としろう
カリフォルニア工科大学助教授

1955年香川県生まれ。東京大学理学部物理学科卒。東大地球物理修士、82年にカリフォルニア大学パークリー校で博士号。ワシントン州大(シアトル)助教授を経て、1985年から現職。専門は固体地球物理学。

